

SHOW HEY シネマルーム

<h2>運命のボタン</h2>	
2009年・アメリカ映画 配給/ショウゲート 115分	
2010(平成22)年3月30日鑑賞	東宝試写室

 Data
監督・製作・脚本:リチャード・ケリー
出演:/キャメロン・ディアス/ジェームズ・マースデン/フランク・ランジェラ/ジェームズ・レプホーン/ホームズ・オズボーン/サム・オズストーン

👁️👁️ みどころ

ボタンを押せば誰かが死ぬが、100万ドルが入る。ある日、そんな選択を迫られたら、あなたは どうする？ 知らない人ならオーケー。それが多くの人の答えかもしれないが、ホントに罪の意識に耐えられる？

そんなシンプルな問題提起から始まる、35歳の新鋭監督の作品は魅力的だが、アメリカ航空宇宙局(NASA)の話をはじめとする脚本のややこしさが少し難？ クライマックスは、ラストに訪れる究極の選択。そんな事態にならないのが一番だが、もしそうなったらあなたはどんな選択を？

* * * * *

あなたなら、どちらの選択を？

本作がアーサー(ジェームズ・マースデン)とノーマ(キャメロン・ディアス)夫妻に、そしてまたあなたに突如迫る選択は、原題とされている「THE BOX」のボタンを押すか押さないかということ。ボタンを押せば100万ドル(約1億円)をもらえるが、その代わりにあなたの知らない誰かが死んでしまうらしい。その選択をするについての条件は、雇い主について一切情報を提供しない、夫以外の誰にもこの提案を話さない、期限は24時間、ということだ。

「THE BOX」が届けられたのは午前5時45分だったが、その中に入っていた手紙には「午後5時に伺います」と書かれていた。そして、時間どおりにルイス家を訪れてきた男スチュワード(フランク・ランジェラ)の顔を見て一瞬ノーマは驚いた。それはスチュワードの顔の左半分が焼けただれていたためだが、そのキズは一体なぜ？ そして、ノーマはどんな反応を？

家の中に招き入れられたスチュワードはノーマに対してボタン装置を開ける鍵を渡し、

明日夕方5時に再度やってくると約束するとともに、家に入れてくれたお礼として100ドル札を渡して去っていった。さてこんな事態の中、ノーマとアーサーの協議の論点は？そしてその結論は？

協議の論点は？結論は？もしあなたなら？

まず一般論としてしっかり注意しなければならないのは、こんなタチの悪い(?)イタズラまがいの行為は、高度な情報化社会となった反面、人間と人間の絆が失われている現代においては日常茶飯事に起きているから、スチュワードのような男は絶対家に入れないことが大切ということ。そもそも、午前5時45分にチャイムを鳴らし、家の前に「THE BOX」を置いていくこと自体が非常識だ。仮に、この「THE BOX」が爆発物だったらどうするの？また、家の中に招き入れたスチュワードの目的が巧みな詐欺だったらどうするの？これは映画だからいいようなものの、現実問題としてはレイス夫妻の対応はまず社会人失格といわれても仕方ないものだ。

それはともかく、そんな面白い(?)選択を迫られたレイス夫妻の協議の論点は欲と道徳の衝突。つまり、もしスチュワードの話がホントだったら100万ドルもらえる代償として誰かが死ぬわけだが、それは誰かの赤ん坊かもしれない。我々はそんな罪の意識に耐えられるか？ということだ。『罪と罰』におけるラスコリーニコフは自分の価値観を貫くため自らの手で老婆を殺さなければならなかったが、スチュワードの提案が魅力的(?)なのは自分は何もしなくていいいうえ、死亡するのは赤の他人だということだ。それならボタンを押しても構わないのでは？あなたの考えはきっとそうだろう。そして、アーサーとノーマの出した結論は案の定・・・。

なぜ時代設定が1976年？

本作は1975年生まれ若手監督リチャード・ケリーが製作・脚本を兼ねた問題作だが、その時代設定は1976年。その理由の第1は、本作の原作となった短編が、スティーヴン・キングが「作家として最も影響を受けた」と語るほどの伝説的な存在となっているリチャード・マシスンが、1970年6月に発表した『Button, Button』だということだ。そして第2の理由は、アメリカ航空宇宙局(NASA)が火星探査プロジェクト「バイキング計画」をはじめて実現したのが1976年だったということ。

ノーマの職業は高校教師、アーサーはNASAラングレー研究所に勤務し、火星探査カメラの設計を担当しながら宇宙飛行士に選ばれる日を心待ちにしていた。そんな設定にしたのは、映画冒頭の選択とそれによって引き起こされる想定外の事態を「バイキング計画」と結びつけるためだ。スチュワードの左顔面の損傷は、彼が昔NASAで働いていた時、ある日雷に打たれたため。つまり彼は一旦死亡したのだが、別人の超能力者として復活してきたというキャラなのだ。スチュワードの顔面のキズはそんな設定を納得させるための工夫だが、今ドキ1976年の「バイキング計画」を知っている人はほとんどいないだろうから、この設定が成功したかどうかは少し疑問。

知らなきゃ、調べなきゃ、関係ないのに・・・

夫婦間であれだけの協議をして結論を出したにもかかわらず、100万ドルを現実を受け取った直後「コトの重大さ」に気づいて狼狽するアーサー、ノーマ夫妻の姿をみていると、「今更そりゃないだろう」という気持ちにさせられるが、それこそまさにあとの祭。また、ここで思うのは女の凶太さと男の弱さ。つまり、ノーマの方はこのお金で引きずっていた足の手術が受けられるという喜びの方が大きかったが、アーサーの方は金を受け取ったことによって誰かが死亡するという罪の意識の方が大きかったわけだ。その結果、アーサーは乗り去ったスチュワードの車のナンバーを控えて車の持ち主を探ろうとしたのだが、たまたまそれができる境遇にあったことがその後の問題を引き起こすことに。つまりノーマの父親ディック（ホームズ・オズボーン）がたまたま刑事だったため、アーサーは色々な調査に乗り出すことにしたわけだ。

これは明らかにスチュワードと交わした約束の違反だが、その調査でわかったのは、あの車はNASAの車であること。また、ディックとの会話でわかったのは、今ディックが調べている原因不明の夫による妻殺し事件の被害者は、アーサー、ノーマ夫妻が100万ドルを受け取った同じ日時に発生しているということだった。アーサー、ノーマ夫妻が100万ドルを受け取った見返りに、誰が死亡したの？そんなことを知らなきゃ、そして調べなきゃ何の関係もないのに。人間の弱さといえればそれまでだが、アーサーは今更なぜそんなことを調べるの？

論点はシンプルだが、脚本は少しややこしすぎ？

本作の主人公はアーサー、ノーマ夫妻と雷で打たれたという謎の男スチュワードだが、映画中盤からはスチュワードの仲間（手下？）やノーマの嫌らしい教え子などが次々と登場してくるうえ、それらの登場人物が次々と鼻血を流しながら異様なストーリーが展開していくので、少しうっとうしくなってくる。

また、本作は究極の夫婦愛、家族愛を描いたものだが、アーサーとノーマの一人息子ウォルター・ルイス（サム・オズ・ストーン）の映画の中盤におけるストーリーへの関与の仕方は少し中途半端。さらに、雷に打たれた男スチュワードが現在NASAの中でどんな力を持っているのかがよくわからないうえ、さかんに彼のセリフとして出てくる彼の「雇い主」の実態も不明。もちろんそれをすべて明らかにすることに意味があるわけではないが、そこらがどうもスッキリしないから、話がこんがらがって全体的にイラつく感がある。リチャード・ケリー監督の脚本は少しややこしすぎたのでは？

冒頭の選択も大変だが、ラストの選択はもっと大変

『舌切り雀』の物語では、大きい箱か小さい箱かの選択を迫られたおばあさんは迷わず大きい箱を選択したが、その選択の是非は？また芥川龍之介の『杜子春』では、何があっても口をきいてはならないという試練が与えられたにもかかわらず杜子春は「お母さん！」

と一声叫んでしまったが、その是非は？

本作は、冒頭に提示された「THE BOX」のボタンを押すか押さないかの選択で、アーサー、ノーマ夫妻は任意にボタンを押し100万ドルを受領したにもかかわらず、アーサーがいらざる行動をとったために引き起こされた事件を描くサスペンス。ところが本作ではラストに至ってもう1つ究極の選択が提示されるから、それに注目。酒をやめるかそれともタバコをやめるかの選択なら大したことはないが、スチュワードがアーサーとノーマに対してラストに示した究極の選択とは？

ここに至って、アーサー、ノーマ夫妻が100万ドルを受け取ると同時にある場所で発生した夫による妻殺し事件の真相(らしきこと)が明らかになるのだが、これ以上ネタばれさせることはできないから、あとはあなた自身の目で。こんな究極の選択をさせられるのは御免こうむりたいが、アーサーとノーマがそんな状況に追い込まれたのは、冒頭を選択をはじめ、それまでにたくさんあった選択をまちがったからだ。そう考えると1976年ではなく2010年の今を生きる私たちは、日々もっと多くのもっと厳しい選択を迫られているのでは？そうすると、その1つ1つの選択を正しいものにするだけでなく、本作のラストにみるような究極の選択を避けることができる正しい生き方に通じるのでは？

2010(平成22)年3月31日記

「キャメっち」にはどちらの路線が？

映画評論家にも真面目型、不真面目型などいろいろある。『キネマ旬報』に「カラダが目当て」というタイトルの刺激的(エロティック?)なコラムを連載していた秋本鉄次氏は、さしずめ不真面目型の典型?約4年間続いたこの連載は2010年2月上旬号の第92回がラスト。「この92回でひとまずシメ。92(この数字もやらしい)で終わるのもエロなボクらしいや。」との意味は？

そんな彼は「評論家発映画批評」の執筆者として6月上旬号では「この“道徳的ジレンマ”に異議アリ!シリアスづいてるキャメっちにも黄信号?」というタイトルで『運命のボタン』を評論。彼には「凡人夫婦に対し、あたかも神の試練のごとく“道徳的ジレンマ”を試し、因

果応報に持ちこむあたりの訳知り顔の底意地の悪さが最後まで腑に落ちなかった」らしく、またリチャード・ケリー監督自身のテーマとおぼしき「自己犠牲」と「破滅への道」は『頭でっかち小僧の空念仏としか思えない』らしい。でも、「しい歳こいて、彼女を“キャメっち”と勝手に呼んで鼻真にしている」彼は、「彼女、最近シリアスづいてブチャババい?」けれども「意外と苦勞人で、賢明なる彼女は、この後はしばらく“ライト感覚”で行きそうだ」から「本作の“悪夢”は本日(を以て)サッパリすっきりと忘れることにした」らしい。さて、「キャメっち」にはホントはどちらの路線が向いているの？

2010(平成22)年6月1日記